



COPD 診療現場の悩みに応える臨床本

評者 川島篤志 福知山市民病院研究研修センター長／総合内科医長

著者の倉原優先生を紹介する際には、質の高い有名なブログから始まることが多い。隠れファンの1人である筆者も、「コストを意識した吸入薬の一覧表」がSNSでアップされていたことをきっかけにコンタクトをとらせてもらった。が、実はまだお会いしたことがない。しかし、そのアプローチが奏功したのか、今回、本書の書評を書かせていただく貴重な機会を頂戴した。医師不足・偏在がある地域基幹病院の病院総合内科医として勤務している立場からすると、「呼吸器専門医が教える診療の鉄則」であるこの書籍の存在はとても心強い（呼吸器専門医の不足・偏在については日本呼吸器学会からも提言がなされている。http://www.jrs.or.jp/modules/guidelines/index.php?content_id=58）。

喫煙者を診る内科医の心強い味方

COPD（慢性閉塞性肺疾患）のアウトラインについて、歴史や定義だけでなく＋αの病態（話題のACOS/CPFE）にも触れておられ、さらには禁煙支援、リハビリテーション・栄養療法、そして人生の最終段階の医療の方法についても言及されているので、“疾患だけでなく人を診る”ことを意識させてくれる。非呼吸器内科医が毛嫌いの可能性のある吸入薬についても、臨床試験結果をコンパクトにまとめながら、薬価や使い勝手についても併記されている。図表や写真が多用されているので、高い質で頭を整理するには最適の項目である。さらに第III部「ちょっと知りたいCOPDの実臨床」には、前立腺肥大症の併存など、現場の悩みに共感してくれている臨床的な書籍である。

「わかりやすいCOPDの本に」とも表現されているように、軽いタッチで記載されているので多忙な医療従事者でも短時間で通読できる。随所にちりばめられている「ステップアップCOPD」というコラムも心を和ませてくれるが、お笑いセンスの質評価は直接お会いした時の楽しみにしておこうと思う。強制的に出る息（強制呼吸）が、「はっ！」（失礼しました!）となるか、「ふう〜」（……溜息）となるか、今後の臨床スタイルが変わるかも……しれない（詳しくは本書p.62参照）。

最後に、この書籍は「COPDを診療するすべての医療従事者へ」とある（帯より）。“喫煙者”を診療しない内科医・かかりつけ医は皆無である。医療従事者としての矜持があれば、この書籍を手にとって自身のCOPD診療の質向上を目指すか、適切に対応してくれる医師との連携の必要性をCOPD患者さんに伝えてあげてほしい。この書籍の存在が、呼吸器内科医が不足・偏在している日本のCOPD診療の質向上に大きく寄与すると確信する。

G



COPD の教科書

呼吸器専門医が教える
診療の鉄則

林 清二＝監修
倉原 優＝著

定価：本体 4,200 円＋税
A5・348 頁／医学書院／2016
[ISBN978-4-260-02429-7]